（別紙２）　　審査の結果の要旨

氏名　陳　南澤

15世紀から19世紀にかけて「朝鮮資料」と総称される文献資料が残っている。これは，日本語をハングルで記した「狭義の朝鮮資料」と，朝鮮語を仮名で記した「日本資料」とに分けられる。ともに，文字体系の違いにより自国資料には現われにくい言語現象を反映していて高い価値をもつ。ハングル音注が日本語音韻史に，仮名音注が韓国語音韻史に役立つのである。陳南澤氏の論文は，広義の朝鮮資料のうち15世紀から18世紀までの文献を網羅的に調べ，日本語と韓国語の音韻史の解明に大きな貢献をしたものである。

氏は，まず「狭義の朝鮮資料」を「日本語学習書」「日本紀行資料」「琉球語をハングルで記録した文献」に分け，各々４点，11点(うち１点は本論文が初出)，２点の文献を取り上げる。また「日本資料」としては７点を対象とする。日本や韓国で研究されてきた文献も少なくないが，先行研究は取り上げ方が断片的であった上に，音韻史の通説に基づいて文献を恣意的に解釈する傾向が見られた。それに対して陳氏は，この時期の朝鮮資料を包括的に扱っており，その分析も，通説を考慮しつつも，まずはそれぞれの文献をきちんと読み取り，文字表記とその背後にある音との関係を慎重に見極めながら論を展開するという手堅い手法を取っていて，高く評価できる。

本論文によって明らかになった点は多くあるが，中でも通説と著しく違う結果が得られた事柄を２点ずつ取り上げると，次のようになる。

日本語音韻史：(1)オ段長音の変遷は，合流の仕方が従来の開合説と大きく異なり，開音とされたアウ系と合音とされたオウ系とが合流して[ou]となっており，同じく合音とされたオオ系は[oo]で18世紀までこれらと区別されていた。(2)15世紀の清濁の対立は，前鼻音がないかあるかの「非鼻音/鼻音」の区別であり，例えばカ行子音は音声レベルでは有声音で実現していた。

韓国語音韻史：(1)15世紀のハングル「･」の音は非円唇後舌中母音，<e>(<>はハングルの転写)の音は非円唇中舌中母音で，従来のどの説とも異なる母音体系が推定される。その後「･」は，語頭音節では<a>に，非語頭音節では<y>に変わったが，後者の変化は，前者の変化が完了した18世紀後半においてもまだ完了していなかった。これは，後者が16世紀，前者が18世紀に生じたとする通説とは逆の順序である。(2)諸説があった口蓋音化の順番は，「<d>口蓋音化」が「<j>口蓋音化」よりも早く生じていた。

日本語の開合の通説は主にキリシタン資料と現代方言に基づくが，陳氏はキリシタン資料は仮名遣いを反映した規範的なものと見るにとどまり，方言も考慮していないなど，新説の提案が旧説を論破するに至っていない点があることは否めない。しかし，それは今後の課題であり，朝鮮資料の範囲内で筋の通った論によって新しい説を出した功績は大きく，本論文は博士(文学)の学位を授与するに値するものと認める。